

論 説

ナチスに抗した勤労青少年 ウィーンの「シュルルフ」

伊 藤 富 雄

目 次

はじめに
「シュルルフ」の概念
「シュルルフ」の特徴
「シュルルフ」の活動場所
「シュルルフ」とナチズム体制
「シュルルフ」と反ナチ抵抗運動
おわりに

は じ め に

私をはじめ「シュルルフ」の存在を知ったのはポイカートの『エーデルワイス海賊団』によってである¹⁾。ナチズムの研究を「下からの社会史」、すなわち庶民の日常生活から始めたことで知られるポイカートの研究を契機に、それまでは「学術的研究に値しない」と見なされていた「エーデルワイス海賊団」や「スウィング青少年」、「モイテン」、そして「シュルルフ」などのナチ社会での「非社会的存在」への関心が高まり、裁判所の訴訟文書や警察の調書などの歴史的資料をもとに、彼らの実態を明らかにする研究が始まったと言える。ナチスに「画一化」された社会でナチズムの制度や規範から逸脱した行動を取り、秘密国家警察や SS（親衛隊）の苛酷な弾圧を受け、司法当局の厳しい制裁措置を受けながらも、ナチズム体制の象徴でもある同世代のヒトラー・ユーゲント（以下 HJ と記す）と激しく戦い、敢えてナチズム体制に抗した勤労青少年にスポットを当て、彼らの実態、さらには彼らの行為が「反ナチ抵抗運動」と見なされるのか否かを検証する研究である。

しかしながら「エーデルワイス海賊団」を始めとしたドイツの他の青少年グループとは異なり、ウィーンで活動した「シュルルフ」に関しては、これまで殆ど触れられたことはなく、筆者の知る限り日本でも全く取り上げられたことはない。

本稿は上述したポイカートを初め、2 年前のウィーン留学中に知り合った歴史家のタント

1) Peukert, Detlev: Die Edelweisspiraten. Protestbewegungen jugentlicher Arbeiter im Dritten Reich, Eine Dokumentation. Bund-Verlag GmbH, Köln, 1980. なお拙訳は『エーデルワイス海賊団』（晃洋書房、2004 年 3 月）

ナー氏など、他の少数の研究者の成果を援用しながら「シュルルフ」元メンバーたちの証言や、ウィーンの「オーストリア抵抗運動記録文書館」で得た当時の記録文書・資料調査に基づき、ウィーンの「シュルルフ」の実態に迫ろうとする試みである。

「シュルルフ」の概念

タントナーによれば戦後間もない1946年、アメリカの社会学者ベッカーがドイツの青少年の状況に関する論文の中で初めてウィーンの「シュルルフ」に言及したという²⁾。ベッカーは彼らが男性的なHJに対抗して「女性的な態度」を取っており、さらには「ホモセクシャル」であると主張している³⁾。しかしながらこの点は後に述べるが、「シュルルフ」の実態とは言い難い。

1953年にはベドナリクが、第一次大戦と第二次大戦の戦間期に存在した「ドイツ・オーストリア社会主義勤労青少年連盟」に対抗している点に「シュルルフ」の意義があるとし、また「シュルルフ」という呼称は「のらくら者や放浪者のことを蔑んだ言葉」で、オーストリアではとりわけ兵士や若者たちの言葉の中で、「のらくら日を送る者」「ぐずぐず歩く者」を表すために使用されたとしている⁴⁾。語源となったドイツ語の schlurfen を独和辞書で引けば「足を引きずって歩く」(フロイデ独和辞典)、とある。1993年に元「シュルルフ」メンバーたちが集まり、彼らの1938年から1945年の活動についてのシンポジウム「歴史工房」が開かれたが、その際に「シュルルフ」の概念について司会から質問を受けた元メンバーは、上に述べた「足を引きずって歩く」というドイツ語から来ているらしく、そうした歩き方から「上品な振る舞いをしない者たち」、「ぞんざいで、だらしない」者たちのことを指すようになったと述べている。つまり、少し背中を曲げて前かがみになり、ナチスの好んだきびきびした歩きかたをせずに「足を引きずって歩く」様子から「ぞんざいで、だらしない」態度を意味するウィーン風表現だというのである。またこうした呼称はナチスが彼らを軽蔑し、否定的な評価を下すのに初めて用い、比較的一般に流布していて、「お前はシュルルフのようだ」と言われれば、それは非難され、軽蔑されていることだとも述べている。さらに「シュルルフ」自身はこうした、彼ら自身が言い出したわけではない否定的な呼称を嫌っていたし、現在でも嫌っているという⁵⁾。

「シュルルフ」はドイツの「エーデルワイス海賊団」と似て大部分が労働者階級出身の徒弟

2) Tanttner, Anton: "Schlurfs". Annäherungen an einen subkulturellen Stil Wiener Arbeiterjugendlicher. Wien. 1993, S.27.

3) ebd.

4) Bednarik, Karl: Der Typ des jungen Arbeiters. Aufstieg und Auflösung eines Klassenbewußtseins. In: Wort und Wahrheit. Monatschrift für Religion und Kultur. 7. Jahrgang. 1. Halbjahr 1952, S.439.

5) Geschichtswerkstatt: Die Wiener 'Schulurfs'. 1938-1945. Wien 1993, S.1.

や補助労働者で、年齢は14歳から20歳前後だった。戦争勃発後にはもっと年上の男たちも加わっている。

先に述べたベドナリクは「シュルルフ」という言葉を聞いたのは、彼が兵役に服していた1936年に、徴兵前は指物師だったある兵士から「俺は勤務中は兵士だが、軍服を脱げばシュルルフなんだ」と聞かされたのが初めてだったという⁶⁾。

彼らは特別な服装や髪型、音楽やダンスの愛好、特定の場所での集結といった点で「ナチスに画一化」されていた他の若者たち、例えばHJの青少年たちとは明らかに異なっていた。そもそも彼らはHJでない者が大半だった。「ナチの家庭出身の青少年がシュルルフになることは殆どありませんでした」と元メンバーは述べている⁷⁾。またHJであってもHJ内部で色々揉め事を起こし、他のメンバーから「好ましくない連中」とみなされていた者たちだったらしい。「シュルルフ」は通常は10人から15人のグループで行動したが、「組織」されてはいなかったという。グループの中に少女たちも混じっていることも時折あったが、彼女たちは「シュルルフの雌猫」と蔑まれて呼ばれ、戦後の復興期には「売春婦」と同じ扱いを受けている：

(彼女たちは)非常に墮落して、自分の身体を提供してでも甘いものを手に入れようとする「シュルルフの雌猫」にまで身を落としている⁸⁾。

そのため彼女たちは今日でも「シュルルフ」と関わっていたことを隠そうとしているという⁹⁾。

「シュルルフ」の特徴

「シュルルフ」メンバーは服装と髪型に特徴があった。服装で目に付くのはまずは帽子だが、彼らに人気のあった「ボルサリーノ」や「パパウ・ハット」を持っていない者は普通の帽子に手を加え、つばの部分テーブルの縁を使って下へ折り曲げたり、アイロンを当てたりして好みの帽子に近いものを作っていた。またザッコと呼ばれた上着はダブルで、できるだけ長く幅の広いものでなければならなかった。しかし勤労青少年には独自のザッコを調達するのは難しく、父親の大きすぎるシングルのザッコにボタンを付けてダブルに作り替えて着用することもよくあったという。またザッコには縫い込んだパットで強調された肩当て、斜めに縫い付けら

6) Bednarik, a.a.O., S.439.

7) Geschichtswerkstatt, a.a.O., S.4.

8) Tantner, a.a.O., S.86.

さらには以下の論文にも同様の記述がある：

Ch.Gerbel/A.Mejstrik/R.Sieder: Die "Schlurfs". Verweigerung und Opposition von Wiener Arbeiterjugendlichen im Dritten Reich. In: E. Talos/E. Hnisch/W. Neugebauer/R. Sieder (Hrsg): "NS-Herrschaft in Österreich". Wien 2001, S.525.

9) Ch.Gerbel/A. Mejstrik/R. Sieder, ebd.

れたサイドポケットが付いていて、背中にはスリットが入っているのが理想だった¹⁰⁾。さらに布地は細縞模様、あるいは派手な模様が入っているものが好まれた。ザッコの下にはシャツ特に熱望されていたのはハインツマンのシャツ ないしは派手なセーターを着こんでいた。ウィーンの寒い冬にはコートを着用したが、コートの襟は立てていた。ズボンはハンプルクの「スウィング青少年」のズボン同様に脚の部分を極端に幅広くし、とりわけ下の方は靴の長さよりも広く、非常に高い折り返しが付いていた。さらにズボンの先をナイフのように鋭く尖らせるために、マットレスの下に敷いて寝押しをおこなった。

「シュルルフ」元メンバーは服装についてこう述べている：

私はワインレッドのザッコを着ていた…。ザッコは私の身長に合わせて長さが85センチもあり、ほぼ膝のあたりまでできていた。ズボンは30センチから32センチの幅で、10センチから12センチの折り返しがついていた¹¹⁾。

首にはスカーフを巻き、時にはネクタイもしていたが、ネクタイには「スウィング青少年」と同じく小さなネクタイボタンが付いていた。ネクタイの色は派手な色、例えば黄色を好み、幸運の星やクローバーのペンダントを付けている者たちもいた。またスカーフやネクタイは週末に集まる時などの、特別な場合に限られていたようである。さらに「スウィング青少年」とは異なり「シュルルフ」は雨傘は携行しなかった。

最も重要な特徴は髪型だった。髪は長く垂らし、襟カラーにまで達していた。また自分の好みの髪型に仕上げるためにポマードで固めたり、クルミ油を使用していた。また彼らはそうした髪型のまま勤務についたという。しかしながら服装と髪型だけではまだ「シュルルフ」とは言えなかった。口の端に煙草をくわえ、上半身を軽く前にかがめ、両手をズボンのポケットに入れてゆっくと歩くのが、だらしなさとエレガントに規定された「シュルルフ」の典型的な態度だった。さりげなく歩くのは見知らぬ者たちに対する無関心、ないしは優越感や嘲笑の現われである。こうした態度・振る舞いは彼らが好んで見た映画の影響によるものらしい。しかしながらスウィングを踊る際には彼らは激しく身体をくねらせ、野蛮で、熱気に溢れた動きを見せたという。

「シュルルフ」メンバーが服装や髪型などに凝っていた実態は、こうした勤労青少年たちの経済的状況をも物語っていると言える。1920年代の勤労青少年たちは典型的なプロレタリアの生活を送っており、服装などの外見にお金をかけることはできなかった。また娯楽もお金のかからないものが主流で、当時流行っていた勤労青少年の週末の徒歩旅行はその典型だった。彼

10) ebd., S.528.

11) ebd., S.529.

らは持参したテントや農家の納屋を借りて寝泊りし、食事も自宅から持参し、なるべく出費を抑さえようとした。そうした徒歩旅行は平均的労働者の週給のほぼ1割程度の費用だったらしい。また映画に行けばそうした徒歩旅行さえも断念せざるをえなかったようだ。しかしながら「シュルルフ」は頻繁に映画館に通い、服装に金を使い、中にはおしゃれな靴のために週給の二倍もするような靴を買っている者もいたという。「シュルルフ」メンバーが自分の給料の大半を娯楽や趣味に充てることができた理由をベドナリクは当時の社会状況の変化にあるとしている。すなわち当時のオーストリアの労働者の賃金は他と比較して決して高かったわけではないが、彼の身近にいた仲間の誰一人として両親を扶養したり、ないしは援助している者はいなかったという。第一次大戦で父親が戦死したり負傷したりしていた家庭の若者たちも、親たちの年金や当時の社会福祉制度のお陰でかなり恵まれた経済状況にあり、そうした経済状況を背景に自分のことしか考えない若者たちが贅沢な生活をしようとし、かつまたそうするのを当然だと考えていたという¹²⁾。

こうした「シュルルフ」たちが仲間内では英語をジャルゴンとして使用していたことをナチスの宣伝紙「民族の観察者」が伝えている。それによれば彼らは“Jony”や“Jacky”といった英語の名前で呼び合い、“How do you do?”や“Good Bye”などの英語での挨拶を交わしていたという¹³⁾。このことは彼らがイギリスのスウィング音楽やアメリカのハリウッド映画を好んだことと関連していると思われる。

「シュルルフ」の活動場所

先にも述べたが「シュルルフ」は1920年代のドイツの「青少年運動」、あるいは「エーデルワイス海賊団」が好んで自然の野山に徒歩旅行に出かけたのとは対照的に、市内の通りの辻、映画館やカフェー、あるいは彼らが住んでいた労働者専用の集合住宅などを主な活動場所としていた。あるいは市内のあちこちにある公園にも集まった。ウィーンの有名なプラター公園は彼らの人気の場所で、ポータブル電蓄を持参してスウィングなどのレコードを聞いたりした。市内にはもちろんスウィング・バンドの入っているレストランやバーなどがあったが、勤労青少年の「シュルルフ」にはそうした場所に出かける経済的余裕はなかった。父親のシングルサイズのザッコをダブルのザッコに仕立てたように、音楽でも彼らは二流、三流のバンドが演奏している公園のカフェーに入るか、レコードで我慢した。また公園のメリーゴーランドからはスウィングの曲が流れていることもあった。

「シュルルフ」に最も人気のあったスターの一人はハンス・ネロートだった。彼は自分の楽

12) Bednarik, a.a.O., S.444f.

13) Tantner, a.a.O., S.78.

団を有していて、特にシャンツ通りの「タイタニア劇場」や「コロセウム」で演奏していた。彼が「シュルルフ」に最も人気のあった曲「タイガー・ラーク」をアレンジした「ブラック・パンサー」を最後に演奏すると、彼らはいつでも熱狂的な興奮状態に陥った。ホイマルクトのテントで行なわれたコンサートでは3千名の若者たちが熱狂して荒れ狂い、警察が駆けつける騒ぎにまでなった。そうしたコンサートは当時はまだ黙認されていたようだが、元「シュルルフ」メンバーは、ナチ支配者たちが若者たちの「不満」のはけ口を提供したのだろうと、解釈している¹⁴⁾。

「シュルルフ」はまた映画を見るのが好きだった。第二次大戦勃発の数年間はまだ上映されていた「ブロードウェイ・メロディー」などのようなアメリカ映画だけでなく、ハリウッドの音楽映画を模倣したドイツのUFA制作のレビュー映画なども好きだった。彼らのスクリーンのアイドルはフレッド・アスタアー、ヨハネス・ヘースターなどで、彼らの会話にはそうしたスターたちが繰り返し登場したという¹⁵⁾。また旧「シュルルフ」メンバーはイタリア映画を見たり、イタリア音楽家たちの演奏会に出かけたり、イタリアモードの雑誌からヘアスタイルを真似たとも証言している¹⁶⁾。

「シュルルフ」とナチズム体制

ナチ当局が「シュルルフ」とは名指ししないものの、彼らの活動に関して初めて文書で触れたものは1939年の書類に見られる¹⁷⁾。それは1939年にHJ幹部たちがHJ隊員に、23時以降に平服でプラーター公園に立ち入ることを全面的に禁止し、さらにHJパトロール班がパトロールにあたる旨をウィーン警察署長に申し出たものである。このことからすでに1939年にはかなりの規模の「シュルルフ」がプラーター公園を中心に姿を見せており、しかもナチスの規範からすれば青少年には相応しくない状況が生まれていたこと、さらには「シュルルフ」とHJ隊員との衝突事件が生じていたことを物語っている。

1940年3月9日に出された「青少年保護のための警察命令」は18歳未満の青少年が国防軍所属の青少年はこの規定から除外された人前で公然と煙草を吸ったり、21時以降は教員が同伴するか、あるいは教員から委託された成人の同伴がなければレストランや映画館に立ち入ることはできない、という内容だった。この規定で「シュルルフ」たちの行為は違法行為となった。「シュルルフ」以外の青少年もこの法律によって映画やダンスの帰りにHJパトロール班に捕らえられ、警察に連行された。この警察命令が出されてほぼ二ヶ月の間に66名の青少

14) Geschichtswerkstatt, a.a.O., S.12.

15) Ch. Gerbel/A. Mejstrik/R. Sieder, a.a.O., S.532.

16) Tantner, a.a.O., S.80.

17) Tantner, ebd. S.31f. 1939年10月27日付きの「帝国大管区ウィーン行政当局」の書類。

年が逮捕・告発されたが、それ以上に多くの若者たちが逃亡している¹⁸⁾。1940年6月には実に450名もの青少年が拘留されたが、警察はまだ「シュルルフ」という呼称を使用していないため、その中にどれほどの「シュルルフ」がいたかは不明である¹⁹⁾。1940年の8月にはダンス禁止令も出されるなど、青少年の余暇の活動を制限し、ナチズム体制の規律を強制しようとする当局の圧力が強化された。しかしながら期待した効果は上がらなかった。そのために1940年の秋には好ましからぬ青少年処罰のための特別な手段、すなわち「青少年拘禁」の制度が導入された。帝国法務省の部屋を使用し、青少年裁判所の監督下に行なわれた拘留は1週間から4週間の長さの「期限拘留」、1回から4回の週末に限定された「週間拘留」、あるいは24時間から48時間の「時間拘留」から成り立っていた²⁰⁾。この措置は処罰記録には記載されず、行政処分として記録されるだけであり、また特に「就労規則」違反行為に対して適用されたが、その理由は戦時体制を支えるために工場などでの生産低下を招かないためだった。「青少年拘禁」に処せられた青少年の数は1943年1月ではウィーンで242名の青少年が合計451週の週間拘留、459名が合計1049週の継続拘留の処分を受けている²¹⁾。

「青少年拘禁」が導入された直後の1940年9月、秘密国家警察は「シュルルフ」とおぼしき勤労青少年とHJとの衝突事件を初めて報告している。逮捕された勤労青少年はHJには所属しておらず、仲間の仕返しのためにHJ指導者たちを襲撃したものであり、政治的な動機に基づく行動ではないとしている²²⁾。この時点から通常の警察だけでなく、秘密国家警察も「シュルルフ」撲滅に関与し始めたことが推察される。しかしながらこの時点でも彼らはまだ「シュルルフ」とは呼ばれていない。さらに彼らとHJの衝突が増えた1941年の春以降の時点でも「シュルルフ」の呼称はまだ使用されなかった。1941年秋になってようやく当局は「シュルルフ」に関しての具体的な情報を得ることとなった。ポイカートの『エーデルワイス海賊団』ではドイツの帝国青少年指導部の「最近の徒党・一味形成の個別事情」の中で「非行青少年グループ」として「シュルルフ」が紹介されている：

「1941年の秋には複数の地区の党委員会から、世間で『シュルルフ』と呼ばれている未成年の若者がウィーンや低地ドナウに出没しているとの指摘がなされた…。HJの規律に反し、他愛ない娯楽や、ダンス、ジャズ、異性との交際などを追い求めているが、政治的な出来事には何の関心も抱いてい

18) Bericht des Polizeipräsidenten Wiens an die Staatliche Verwaltung des Reichsgaues Wien vom 15.6.1940.
In: ADR, RSTH, Karton 341 (Signatur 1911/1940, Grundzahl 20/2/40)

19) ebd.

20) Gerbel, Christian: Zur "Kolonialisierung der Lebenswelt" von Wiener Arbeiterjugendlichen unter NS-Herrschaft, S.6.

21) Tantner, a.a.O., S.41 .

22) ebd., S.35f .

ない。政治的な敵対活動や、秘密裏の『シュルルフ』結成の動きを示すものはこれまでのところ何一つ確認されていない。とは言え国家に対する彼らの否定的な態度、無気力、有害な態度からすれば『シュルルフ』は根絶されねばならない。」²³⁾

1942年4月21日にHJ隊員を殴った二人の徒弟が逮捕された事件で、秘密国家警察は初めて公式に「シュルルフ」の呼称を使用した：

連中の外見からすると「シュルルフ」と呼ぶことができる。²⁴⁾

「シュルルフ」は次々に逮捕されていくことになった。8月、9月には数十名の「シュルルフ」が逮捕されているが、秘密国家警察は彼らの行動が「政治的な動機」から生じたものでないことを確認して安堵している²⁵⁾。しかしながら「シュルルフ」の危険性を考慮した当局は彼らの撲滅のためにはHJや警察だけでなく、ナチ党員や一般市民の協力が必要不可欠だと考え、ナチ党の新聞「民族の観察者」ウィーン版を利用して「害虫撲滅」を訴えた²⁶⁾。さらには「青少年保護のための大管区共同体」を設置し、「シュルルフ」を初めとする、ナチズムの規律に反する青少年の撲滅を図ろうとしたが、HJとの暴力沙汰は今や日常茶飯事となった。そこでナチ党内で、そうした青少年に対抗するために更なる措置が取られることになった。大管区指導者シーラッハによる「HJ警報カードファイル」がそれである。例えば「HJ警報カードファイル」では「態度や規律」の点で問題があるとされた青少年を、HJ地区指導者がリストアップし、カードファイルに記入し、HJ特別部隊や「教護施設」に送り込んだり、「青少年拘禁」に処すために用いられたらしい。しかしながらそれでも「シュルルフ」とHJとの衝突は収まらなかった。

HJ地区指導者は「シュルルフ」に対する「特に効果的な措置」として彼らが大事にしている「髪を切ること」を推奨し、実際に髪を切られた「シュルルフ」メンバーがいる。それに対して「シュルルフ」の側もHJのシンボルである隊員バッジを引き千切って対抗した。さらなる措置は「シュルルフ」を公然と物笑いの種にすることだった。そのために彼らの髪や服装を大袈裟に表現し、揶揄する特別のブラカードも作られ、「われわれは連中を拒絶する」という文章も添えられていたという。ある「シュルルフ」メンバーはそうした悪意のブラカードを見た折りのことをこう述べている：

23) Peukert, a.a.O., S.219f.

24) Tantner, a.a.O., S.38.

25) DÖW (Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes) 5733 f. Gestapo. Tagesberichte. Nr.2 vom 2.5. Oktober 1942. S.5 f.

26) Tantner, a.a.O., S.39.

私は何と言うことはなかったが、お袋は気分を害したようだった…。²⁷⁾

HJ メンバーにはナチ当局から補助警察の資格が与えられており、彼らは「シュルルフ」を逮捕し、警察に引き渡すことができた。また HJ は警察や突撃隊、ナチス機械化部隊などの支援も受けており、まさにナチズム体制そのものによる「シュルルフ」攻撃と言えた。そのため「シュルルフ」の HJ に対する態度も次第に変化するようになった。すなわち、当初は HJ に襲われた仲間の単なる報復だったものが、HJ 制度そのものに対する攻撃を行なうようになり、集団で HJ 隊員やパトロール班を襲い、HJ の集会場を襲うようになった。その際に彼らは HJ の象徴であるバッジを取り上げることを忘れなかった。「シュルルフ」と HJ 対決の激化を 1942 年 9 月の「ウィーンの観察者」紙が報告しているが、「シュルルフ」の問題はもはや「教育問題」などではなく、「犯罪者」である彼らを警察はあらゆる手段を用いて撲滅し、場合によっては「強制収容所」送りにすべきだと主張している²⁸⁾。

しかしながら HJ は「シュルルフ」を撲滅することはできず、最終的には秘密国家警察が大量に動員され、かくして「シュルルフ」メンバーの多くは逮捕され、様々な施設へ送られ、早々に帝国勤労奉仕団や国防軍に招集されていった。

逮捕された「シュルルフ」メンバーたちの一部は 1940 年にウィーン大管区指導部によって創設されていた「反社会的分子委員会」によって、いわゆる「労働キャンプ」送りになった者たちもいる。オーストリアには上部ランツェンドルフに収容所が作られていたが、改善の見込みがないと見なされた者は最終的にドイツのモーリングゲン青少年強制収容所に送られることになった。ゲルベルは「反社会的」と見なされ、最終的にモーリングゲンへ送られた少年のことを詳細に紹介している²⁹⁾。

また少女たちはウィーン近郊のクロスター・ノイブルクやウィーン北西部のアム・シュタインホーフに作られた「労働教育収容所」に送られている。さらにはラーフェンスブリュック女性強制収容所のすぐ側に作られたウッカーマルク「青少年保護収容所」に収容されている。1944 年の半ばまで帝国刑事警察局が処理した 800 名のウッカーマルク送りになった者たちの内、ウィーン出身者は 85 名だった、とのことである³⁰⁾。

27) Geschichtswerkstatt, a.a.O., S.10.

28) Ch. Gerbel/A. Mejschik/R. Sieder, a.a.O., S.542.

29) Gerbel, a.a.O., S.344ff.

30) Tantner, a.a.O., S.48., 及び Gerbel, ebd., S.340.

「シュルルフ」と反ナチ抵抗運動

「シュルルフ」は果たして「反ナチ抵抗運動」を行なったと言えるのであろうか。ベドナリクは「シュルルフ」には革命的な使命感などはなく、政治的に無関心であり、身近な消費文化に目が向いており、自分たちの個性を守り、強調した生活を送っていただけだと述べている³¹⁾。

上述したように「シュルルフ」は確かにナチズム体制に異を唱え、独特の服装や髪型、なげやりな態度などでナチズム体制の規律や規範を破り、さらにナチ体制の象徴ともいべき HJ と激しく闘ってきた。しかしながら彼らは社会主義者や共産主義者などのように明確な政治的意図の下に体制に敵対したとは言えず、カトリック教徒やエホバの証人たちのような、まさに命懸けの抵抗運動を行なったとも言えない。しかし彼らを単なる「犯罪者」扱いにすることは、「シュルルフ」を一まとめにして反ナチ抵抗運動を行なった、と主張するのと同様に乱暴であろう。ヤークシッツやポッツは「シュルルフ」の行動は「非政治的な行動」ないしは「市民的抵抗」であり、「単に逸脱する態度」と見なされる場合もあるが、「社会的抗議」と評価すべき点もあるとしている³²⁾。オーストリア抵抗運動記録文書館の館長で、オーストリアの戦争責任やオーストリアにおける反ナチ抵抗運動の研究に多大な功績を為し、今なお館長として活躍しているノイゲバウアーは『抵抗と反対派』の中でオーストリアにおける反ナチ対抗運動についての概観を述べているが、その中で彼は仮病を使つての「労働忌避」、ナチズム体制とは相容れない「服装、髪型、音楽」などの嗜好という点で、「シュルルフ」とは名指ししていないものの、明らかに「シュルルフ」と一致する「勤労青少年」を「非政治的な反対派」として捕らえている³³⁾。さらにハニシュは「シュルルフ」たちの行為は「狭義の意味では政治的な反対派ではなかった」としつつも、「ナチズム体制」からは「危険視」された「拒否」の形であったと一定の意義を認めている³⁴⁾。またゲルベルらは彼らの HJ への公然の挑戦や労働忌避は「支配的なイデオロギー」と自発的に衝突しようとしたものでもないし、「明確な政治的動機」から生じたものでもないとしつつも、彼らを「ナチズム国家に対する反対派」と位置づけている³⁵⁾。先の「歴史工房」の元メンバーは自分たちの行動は「組織された抵抗ではなく、自発的な抵抗」で「一部は非政治的であり、一部は本能的に反ナチ的」であり、仲間の中には「政治的抵抗」を行なった

31) Bednarik, a.a.O., S.439ff.

32) Tantner, a.a.O., S.48.

33) Wolfgang Neugebauer: Widerstand und Opposition, in: Ns-Herrschaft in Österreich, 2001, S.205.

34) Ernst Hanisch: Österreichische Geschichte 1890-1990. Der lange Schatten des Staates. Österreichische Gesellschaftsgeschichte im 20. Jahrhundert, Wien 1994, S.389.

35) Ch. Gerbel/A. Mejschik/R. Sieder, a.a.O., S.545.

者たちもいたと語っている³⁶⁾。

「シュルルフ」は確かにナチズム体制とは相容れない文化や「ジャズ」に熱狂してはいたが、だからと言ってドイツ軍がアメリカ軍やイギリス軍を攻撃することに反対し、そのために何らかの行動を取ったという事実はない。彼らの活動が 資金不足でしばしば仕方なく 公衆の面前で行なわれ、そのためにナチズム体制から挑戦だと受け止められ、望まずして政治的な意味をも有することになった、というのが実状かもしれない。

また「シュルルフ」は職場でわざとゆっくり仕事をしたり、あるいは数日間そもそも職場に姿を見せないこともあった。そのために「労働忌避」で告訴された事例、さらにはそうした労働忌避の罰則として週間拘留が課せられたが、週間拘留開始時間に当該の若者が出頭しないために、300 件のうち刑の未執行が半数にも達した例も報告されている³⁷⁾。

しかしながらこうした彼らの「労働忌避」も余暇はしっかり確保したいという、単なる若者らしい発想から生まれ出たものであり、オーストリアの将来のために「連合軍の勝利で戦争を早期に終結させる」、というような「政治的な判断」に基づいた行動などでは決してなかった。

「シュルルフ」はまた HJ だけでなく国防軍に入ることも拒否しようとした。歴史工房のシンポジウム参加者の一人は兵役を逃れるために黄疸や嘔吐、循環器障害を短期間引き起こすために、日に干したイワシを食べたり、チョークを飲み込んだり、胆汁色素を注射する方法を知っていたと述べている³⁸⁾。しかしながらそうした試みも政治的な立場からの「反軍国主義」や非暴力の立場からなされたものではなく、若者らしく青春を楽しみたい、暢気に過ごしたいという、ごくありふれた、また当然の気持ちから出たものだと理解すべきであろう。つまり「シュルルフ」は望まずしてナチズム体制に抗することになったのである。しかしながらナチズムの暴力装置の一つとして機能していた HJ を攻撃し、その勢力に多大な損害を与えたこと、あるいはナチズムの規律に反する彼らの髪型や服装、さらにはナチズムが求めた男性らしいきびきびした態度を否定するのらくらし態度、「労働忌避」や仮病を使っての国防軍入隊拒否、それらは少なくとも一時期の間、ナチズム体制への順応を拒み、ナチズムによる画一化、支配に異議を唱え、ナチズム体制に一定のダメージを与えたことを考えれば、「非政治的」であったとしても、また自ら望み、率先して行なったわけではなかったとしても、結果的には「反ナチ抵抗運動」の一翼を担ったと評価すべきであろう。タントナーも彼らの行動は「民間人の抵抗」、「社会的プロテスト」だったと位置づけている³⁹⁾。

36) Geschichtswerkstatt, a.a.O., S.5.

37) Ch. Gerbel/A. Mejsirik/R. Sieder, a.a.O., S.537.

38) Tantner, a.a.O., S.51.

39) ebd. S.48.

おわりに

以上ウィーンの「シュルルフ」を巡って、その概念、特徴、行動・活動の場、ナチズム体制との関係、さらには彼らが「反ナチ抵抗運動」を行なったと言えるのか否かを検証してきた。「はじめに」でも述べたが先年のウィーン留学の後半にオーストリア抵抗運動記録文書館に通い、彼らの実態に迫るべく当時の秘密国家警察や裁判所などの記録文書に当たったが、マイクロフィルムを中心とした膨大な資料から「シュルルフ」に関する資料を選別、解読するのは正直言って私の能力を越えるような大変な作業だった。しかしながら幸いにも私と同じように「シュルルフ」に関心を抱いていたタントナー氏に出会い、氏の「シュルルフ」に関する論文を基に議論を行なったり、帰国後もメールでのやり取りを行なう中で多くのことを教わった。この論文の完成にあたり、改めて氏に感謝したい。今後はオーストリアにおける他の「反ナチ抵抗運動」の実態を取り上げつつ、「シュルルフ」の問題も継続して扱っていきたいと考えている。